

福野地域 会議録

件名	福野地域提言実現検討組織 人づくりグループ 第11回会議		
日時	令和2年3月24日（火）19時～21時	場所	有川呉服店（福野地域 上町通り）
出席者	人づくりグループ メンバー：3名、福野縞の会メンバー：8名、 地方創生推進課：2名		
内容	・福野縞の歴史を学ぶ、 ・福野縞の会の活動について話を伺う、 ・福野縞の機織り体験		
概要	<p>◆福野縞の歴史について、福野縞の会メンバーの勢濃力夫さんからお話を伺う →別紙、資料「福野縞の興隆」参照</p> <p>◆福野縞の会の活動について、福野縞の会メンバーの栗山芳雄さんからお話を伺う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エコビレッジ推進課の補助金により、機織り機を整備（修復）した。 ・経糸（たていと）を並べる整経（せいけい）の作業は、手動でも出来るが、ほとんどは、福野地域岩武新の県産業技術研究開発センター生活工学研究所で所有している整経機を利用させてもらっているとのこと。生活工学研究所の前身である県繊維研究所に勤務されていた、メンバーの六反さんの人脈により利用させていただいているが、機械そのものが大変古く、今後もし故障しても修理は難しいのではないかと思います。もしそうなった時にどうするかを心配しているとのこと。 ・伝統工芸品として、福野縞の会のメンバーがサポートしているが、収益は材料代にもならないとのこと。もし、人件費や材料代などと考慮して値段を付けると、高額になり過ぎるそう。 ・活動を継続していくためには、市からの助成が不可欠、とのこと。福野縞を商品化して販売するのが目的ではなく、かつての福野の経済を支えた素晴らしい綿織物の福野縞を後世に伝える活動をしているそう。 ・現在の50～60代の人たちに、福野縞の記憶はもう残っておらず、更に上の世代である70～80代の私たちが、福野縞を伝えていかないといけないと思っているとのこと。 ・若い皆さんには、この会や福野縞の応援団になってほしいとのこと。 <p>◆次回会議</p> <p>日時…令和2年4月2日（木）午後7時30分から</p> <p>場所…福野庁舎3階 302会議室</p> <p>内容…今後の取組内容の検討について</p>		

福野縞の興隆

旧福野町では、明治から昭和にかけて「福野縞」と呼ばれる綿織物が盛んに生産され、日常生活にも幅広く普及していた。また、この福野縞は他地域にも普及し、福野の経済を支えていたが、このように伝統産業として発展したのは、寺嶋屋源四郎によるところが大きい。

江戸時代に幕府より幕用の布の生産を下命されていた加賀藩は、福野に布織りを命じ、その命を受けた寺嶋屋源四郎は寛政6(1794)年に越後縮^{えちごぢりみ}の製織を視察し、職工を雇って連れ帰って福野の住民に製織を伝授し、福野での本格的な布生産を開始した。やがて美濃国(岐阜県南部)に京都より伝わった菅大臣縞が幅広く普及していることを伝え聞き、文政3(1820)年に岡崎新左衛門らの職人を招いてこの菅大臣縞の生産に乗り出し、加賀藩の奨励もあって福野で盛んに菅大臣縞が織られるようになった。その後技術の改良により良質な織物が生産されるようになり、寺嶋屋源四郎が資本主となって集荷・販売するという生産体制が確立され、以降福野の菅大臣縞は福野のみならず、加賀藩の経済をも支えるまでになった。

菅大臣縞とは当時一般的に普及棧留縞^{さんどめしよ}の一種であり、京都下京区の左大臣菅原道真の生誕地である菅大臣町で織られたものである。また棧留縞という名は、インドのセントーームス港より積み出されて日本に輸出されたことに由来する。

古来より日本の織物は麻と絹であったが、16世紀ごろになってようやく綿織物が登場するようになった。江戸期にかけて徐々に普及し始めたが、明治初期にはまだ麻織物が多かった。その後の西欧化による近代化によって綿織物の需要が飛躍的に増加し、次第に綿織物が中心となるようになった。

明治に入り、需要の増加に応じて福野縞も生産を拡大し、販売先は全国に及ぶようになった。増え続ける需要に応じるため、織物業者は原料を出して下職に織らせる出機^{だしけ}という形をとるようになった。この出機は東西砺波・婦負・射水郡に加えて石川県の河北郡にまで進出し、その数は9000台にまで及び、年間生産量は45万反に達した。

当初原料は手紡ぎの糸を用いていたが、明治16(1883)年になると手紡ぎの糸から次第に機械で生産される紡績糸になり、更に明治19(1886)年頃より2本の糸をより掛した双子糸が用いられ、「双子縞」として生産が飛躍的に伸びた。また、糸を染める染料も従来の藍染染料から輸入による化学染料が用いられ、染色の能率も上がった。需要が増加する一方で、明治35(1902)年頃から粗悪品が出るようになり、販売に支障が出たのを受け、明治37(1904)年に福野織物同業組合が発足し、品質の維持に努めたおかげで他地域から「越中双子縞」という名で高い評価を得、生産が年々拡大していった。

大正期に入ると、機織り機も手織り機から足踏み機や動力機が主流になり、更に生産を伸ばし、その販路は北陸三県はもとより、北海道・東北・東京・大阪の国内ばかりでなく、中国・朝鮮東南アジアなどの海外にまで及ぶようになった。またこの頃、明治期から織られるようになった「福野縞」と称される縞織物も特産品として重宝され、生産の最盛期に

福野縞の興隆

旧福野町では、明治から昭和にかけて「福野縞」と呼ばれる綿織物が盛んに生産され、日常生活にも幅広く普及していた。また、この福野縞は他地域にも普及し、福野の経済を支えていたが、このように伝統産業として発展したのは、寺嶋屋源四郎によるところが大きい。

江戸時代に幕府より幕用の布の生産を下命されていた加賀藩は、福野に布織りを命じ、その命を受けた寺嶋屋源四郎は寛政6(1794)年に越後縮^{えちごちぢみ}の製織を視察し、職工を雇って連れ帰って福野の住民に製織を伝授し、福野での本格的な布生産を開始した。やがて美濃国(岐阜県南部)に京都より伝わった菅大臣縞が幅広く普及していることを伝え聞き、文政3(1820)年に岡崎新左衛門らの職人を招いてこの菅大臣縞の生産に乗り出し、加賀藩の奨励もあって福野で盛んに菅大臣縞が織られるようになった。その後技術の改良により良質な織物が生産されるようになり、寺嶋屋源四郎が資本主となって集荷・販売するという生産体制が確立され、以降福野の菅大臣縞は福野のみならず、加賀藩の経済をも支えるまでになった。

菅大臣縞とは当時一般的に普及棧留縞^{さんどめしよ}の一種であり、京都下京区の左大臣菅原道真の生誕地である菅大臣町で織られたものである。また棧留縞という名は、インドのセントーThomas港より積み出されて日本に輸出されたことに由来する。

古来より日本の織物は麻と絹であったが、16世紀ごろになってようやく綿織物が登場するようになった。江戸期にかけて徐々に普及し始めたが、明治初期にはまだ麻織物が多かった。その後の西欧化による近代化によって綿織物の需要が飛躍的に増加し、次第に綿織物が中心となるようになった。

明治に入り、需要の増加に応じて福野縞も生産を拡大し、販売先は全国に及ぶようになった。増え続ける需要に応じるため、織物業者は原料を出して下職に織らせる出機^{だしはた}という形をとるようになった。この出機は東西砺波・婦負・射水郡に加えて石川県の河北郡にまで進出し、その数は9000台にまで及び、年間生産量は45万反に達した。

当初原料は手紡ぎの糸を用いていたが、明治16(1883)年になると手紡ぎの糸から次第に機械で生産される紡績糸になり、更に明治19(1886)年頃より2本の糸をより掛した双子糸が用いられ、「双子縞」として生産が飛躍的に伸びた。また、糸を染める染料も従来の藍染染料から輸入による化学染料が用いられ、染色の能率も上がった。需要が増加する一方で、明治35(1902)年頃から粗悪品が出るようになり、販売に支障が出たのを受け、明治37(1904)年に福野織物同業組合が発足し、品質の維持に努めたおかげで他地域から「越中双子縞」という名で高い評価を得、生産が年々拡大していった。

大正期に入ると、機織り機も手織り機から足踏み機や動力機が主流になり、更に生産を伸ばし、その販路は北陸三県はもとより、北海道・東北・東京・大阪の国内ばかりでなく、中国・朝鮮東南アジアなどの海外にまで及ぶようになった。またこの頃、明治期から織られるようになった「福野縞」と称される縞織物も特産品として重宝され、生産の最盛期に